

桜島

映画文学人生論

原作：梅崎春生 (1946) 「素直」
参考：『日の果て』(1947) 「思索」
『ボロ家の春秋』(1954) 「新潮」
『狂ひ凧』(1963) 「講談社」
『幻花』(1965) 「新潮社」

七月初、坊津にいた。遣唐使が船出をしたところである

梅崎春生が第一次戦後派の作家で、その作品は私の感性にあい、愛読者になれそうだということはおとつくの昔から予感していた。それなのに、今まで読む機会がなかった——そんなねじれ現象は往々にして作者と読者の関係に生じるらしい。

予期した通り、『桜島』は私の感性にうったえる作品だった。「七月初、坊津（ぼうのつ）にいた。遣唐使が船出したところである」という書き出しは読者の想像力をふくらませてくれる。

坊津とはどこだ。なぜそんなところから一千年以上前に遣唐使が船出したのか。なぜそんなところに作者の分身がいたのか。

坊津は鹿児島県の港で、戦争中は海軍の特攻兵器震洋の基地だったという。震洋は戦争の末期、本土決戦になった場合、上陸しようとする米軍の船団に体当たりして自爆攻撃する兵器だが、本土決戦が行われる前の昭和二十年八月十五日に終戦となったため、使用されなかった。

作者の分身である村上兵曹は坊津で基地通信に当たる暗号員だった。郵便局の女事務員と仲良くなったたり、よそめにはのんびりと日をすごしていたが、或る朝、桜島への転勤を命じられる。その夜、アルコールに水を割って、ひとり痛飲した。泥酔して峠の路を踏んだ時、よろめいて一間ほど崖を滑り落ちた。瞼が切れて、血が随分流れた。



桜島

映画文学人生論

窪地に仰向きになったまま、凄まじいほど冴えた月のいろを見た。

坊津から徒歩で枕崎へ、枕崎から汽車とバスで桜島へ。その途中で、うらぶれた一軒家の妓楼に泊まる。妓には、右の耳がなかった。

「いつ、(米軍は) 上陸してくるかしら」と彼女は聞いた。

「近いうちだろう。もうすぐだよ」

「——あなたは戦うのね。戦って死ぬのね」
彼は黙っていた。

「ねえ、死ぬのね。どうやって死ぬの。よう、教えてよ、どんな死に方をするの」。

私は死ぬなら美しく死にたいと、思う。私は何の為に生きてきたのだろう。何の為に？ 私とは何だろう。生れて三十年間、言わば私は、私というものを知ろうとして生きてきた。ある時は、自分を凡俗より高いものに自惚れて見たり、ある時は取るに足らぬものと卑しめてみたり、その間に起伏する生活として来た。もはや眼前に迫る死のぎりぎりの瞬間で、見栄も強がりも捨てた私が、どのような態度を取るか。

しかし、八月十五日に終戦となり、私は死にそこねた。『桜島』を発表し、作家になった。二十年後、ふたたび坊津を訪れて、『幻化』を書き終えてから肝硬変で死んだ。

赤と青との濃淡に染められた山肌は、
天上の美しさであった
梅崎春生